

一級建築士



アーキテクト
ライセンス



インテリア
デザイン
認定書



コントラクター
ライセンス



リード
カウンシル



現在

建築に関する実務経験が最低2年から4年以上ないと受験できない

アメリカで建築士として仕事をするには、この資格は必須!

インテリアデザインのクラスの受講やデザインの経験がある

改築や建築を実際に請け負うためにはこの免許が必要

リードは自然環境を第一に考える団体

自分の設計事務所「MOA」で住宅などの設計を手掛ける



D=A=T=A

岡本雅夫氏
(おかもと・まさお)
日本で10年、清水建設で建築士として働き、来米、アメリカで20年、同会社の現地法人で働く。後、自分の設計事務所「MOA」を設立。

■MOA
1136 Fremont Ave.
Suite #106
South Pasadena
(626)441-2483



建築士

資格を取るための勉強が実際に役立つ

🍴 | 手に職をつければ
将来も食いっぱぐれない

高校を卒業後、岡本さんは大学へ進学の際に建築学科を選んだ。実は建築自体に興味があったわけではなく、成績優秀者だけが取れる学科というところに魅力を感じ、性分の闘争心から選んだのだった。高校時代、成績は確かに優秀だったので、建築学科への入学が認められた。また、「手に職をつければ将来食いっぱぐれることはない」と思ったからでもあった。

♥ 恋をしてしまった

建築学科は理工学部であるのにもかかわらず、授業内容はまったく理工学部らしくな



い。デッサンや油絵のクラスがあり、すでにある物をコピーディネットしながら新しい物を作っていくやり方を学ぶ。「工学的であったが、芸術的でもあった」と岡本さんは話す。オリジナルを作ることが好きだった彼は、ほとんど建築という自分の創造性が試される分野にはまっていた。まさに、「恋をしてしまった」のだという。

大学時代は、建築ばかりの毎日。古本屋に行つては、デザインや著名な建築家の書いた本を買いあさつては読みふける。二か月ごとに出题される設計課題。一人で案を練つて図面を書き、それを基盤に模型を作る。これはまさに徹夜の作業。今ではコンピュータ上で図面を書いていくことはできるが、当時はインクと紙で仕上げていたので失敗したら一からやり直し。だが、建築が楽しくて仕方がなかった岡本さんは、それを「苦」というよりも「挑戦」として受け取っていた。

学生時代から人のコピーをするのが嫌だった岡本さんの設計の対象は、住宅から美術館、学校まで広がった。当時の自分の設計を振り返る。「个性的で実に我ながら垢抜けているデザインだと思う。でも、予算を考えるとこれは夢のまた夢の話だな」と笑う。が、「こういう飛びぬけたアイデアを出してこういう姿勢を忘れたくないんだ。だから、この図面はずっと大切にとっておくんだ」と語った。

は、一つの疑問を抱いていた。「建築にしか興味をもてない。それでいいのだろうか?」。そんな時に岡本さんの父親が「一行に一切を託せば、一行で一切が分かる」と岡本さんを諭した。その言葉を胸に岡本さんは建築士として生きていくことを決意。そして、自分の設計事務所を持つ「独立」を早くも夢見た。短期でお金を稼ぐには、給料がいい会社に行かなければと、清水建設に就職した。入社して三年目に、いつでも独立できるようにと、一級建築士の試験を受けて合格。だが、自分の手掛けた設計がほとんど形になっていく様を目の当たりにしているうちに、新たな「楽しみ」を岡本さんは見出していた。

一九七〇年代の日本。欧米の会社が日本にどんどん進出していた時代でもあった。父親が駐在員だった岡本さんは、高校時代をアメリカで過ごしていた。そのため、岡本さんが携わった設計の多くは外資系業者だった。通訳を兼ねた建築士として第一線に立たされた。「欧米側の設計と日本の規定に大きな違いがあつてね。でもクライアントの意見も尊重しなければいけないから、手探り状態。たとえば、建設予定地の保健所や組合ともやりとりしたりして。でも、自分のスタンスは崩さないようにした。たとえば、自分が把握していない規定やなんかは自分がしっかり理解するまで絶対に訊きなかつたりしてね」。得意としていた分野は工場設計。茨城にあるネッスルの工場設計は岡本さんが手掛けた。「ネッスルは、一貫した工場を建設するために設計を完全



大学時代も独立は

大学を卒業。建築の勉強に明け暮れた生活にいったん終止符を打った岡本さん

マニユアル化していた。当時の日本は建設ラッシュの最中で、品質よりも生産性を重視していた設計がよく見受けられたが、あくまでも欧米の業者は品質にこだわった。コンクリートを作る水の分量や壁の厚さまでも規定されていた」。岡本さんは、外資系の会社の工場設計を受け持つことで欧米の設計法を学んでいった。

✖一九八一年。来米

清水建設がロサンゼルスに現地法人を作ることになり、岡本さんは駐在員として来米した。ここでも岡本さんは新たな闘いを挑むことになる。清水建設から送られてきた現地スタッフは岡本さんを含めてたったの四人。何もないところで一からのスタートだった。「現地で採用したアメリカ人からフィートとインチでの図

面の書き方を教えてもらったりしてね」と当時の様子を話す。

アメリカで建築士としてやっていくには、もちろん「資格」が必要となる。一番初めの難関は「Architect License」。試験日程は約一週間。製図版とランチボックスを持って試験会場へ足を運び、半日かけて図面を書く。この試験を通ったら次は面接。実際に自分が手がけた図面やパネルを面接官に見せて説明する。日本で働いていたところから英語は使っていたため、語学の問題はさしてなかったが、日本とアメリカでの規定の違いに戸惑いを隠せなかった。「自分ももう十年もの建築家としての経験もあったから、この試験を合格する自信はあった。日本とアメリカの設計に対するアプローチの仕方の違いやアメリカにしかない設計ルールがあって、それらを自分の中で整理するためにも、この試験勉強は身になった」。その後、インテリアデザインの資格（CCID）を取得。また、建設を担当していた者の帰国もあり、九一年に建築請負業者としての免許「Contractor License」も取得する。

👉二〇〇一年。独立

自分の培った実績と経験をもとに独立を決意。大学を卒業してすぐに独立を夢見た若者は、三十年という歳月を経て夢を実現させた。そして、また新たな夢を発見する。「世のため人のために仕事をしたい。それがいい仕事につながるのではないかな」と話す岡本さんは、非営利団



©Masao "Mike" Okamoto

体のLEEDに出会う。LEEDは、自然環境を第一に考えるガイドライン「グリーン」を提案し、実際の建築物を評価し証明書（サティファイケート）を与えている。岡本さんは、独立してまもなくこの団体のコンサルタントになるための試験を受けて見事合格を果たした。試験内容は、再利用を考えた設計や材料、それからデザインに至るまで建設と建築の環境問題が問われている。

「テーブルコーダに質問と答えを録音して、事務所への行き帰り車の中で何度も聞き返していました。覚えなければいけない事項が多くてね」。省エネと自給自足。環境を考えて作られた建築物。グリ

ーンビルディング」が今後、人々に普及されて、建築までのコストを下げることで岡本さんの新たななる「夢」だ。

■ 笑いと涙の人生

若い頃は作曲もやってたんです。何かを一から作っていくことが好きで。一度、タイガースのトップちゃんと一緒に曲を作って、ユーミンにそれを持ちかけて、あともう少しでレコーディングってとこまでいったこともあったんだよ。いろいろあって、結局だめになっちゃたけど。楽しかったな。